

安東次男著作集 第七卷

安東次男著作集

第七卷

青土社

安東次男著作集 第七卷

© 1975 Seidosha

昭和五十年九月二日印刷

昭和五十年九月二十日 限定1000部発行 0390—90015—3978

定価 四九〇〇円

著者 安東次男

発行者 清水康雄

題字 加藤楸邨

発行所 青土社 東京都千代田区神田神保町一―二九 市瀬ビル (電)二九二一七〇七六

振替東京 192955

印刷所 大盛印刷

製本所 美成社

第七卷

目次

「抵抗期」に入る詩人像

アラゴン「リラとバラ」覚書

7

エリュアールの詩 35

詩人の境涯 55

言葉とイメージについて 147

年金生活者の思想 161

現代詩の展開 211

現代芸術への一視点 299

幻視者の文学 333

ある鑑賞 359

金子光晴覚書 393

伝統詩と近代詩 403

現代詩のゆくえ 433

「草上記」を読む 449

野間宏の詩について 455

詩時評（一九六五・二～一九六八・十二） 463

三好達治をしのぶ 575

金子光晴その人と作品 583

詩・その沈黙と雄弁 621

象徴派の詩人 645

ボードレールと日本 665

田中冬二の詩 671

断絃 689

松本たかしの芸 699

歌仙 705

口絵は西脇順三郎氏による著者の肖像。一九七一年画。

安東次男著作集
Ⅶ

「抵抗期」に入る詩人像

アラゴン「リラとバラ」覚書

アラゴンの対独抵抗中の最初の詩集『断腸』は、一九四一年十月、パリのガリマール書店から出版された。そのなかに、「リラとバラ」と題した一篇がある。

おお、開花の月よ 変身の月よ、

雲もなかった五月 七首で刺された六月、

わたしは忘れまい、リラの花を バラの花を

春が襲のなかで守ってくれた者たちを。

わたしは忘れまい、あの悲劇の手品を、

行列 叫喚 群衆 太陽……

愛を積込んで行った装甲車、ベルギーの贈物を。

震える空気 蜜蜂の唸りながらの街道

諍^{いさか}うよりはましな愚かな凱歌^{かちどき}

血の予感を口づけする紅、

酔痴れる群衆にリラの花で飾られて

砲塔のなかに立ったまま死にかけていた者たちを。

わたしは忘れまい、消えた幾世紀の

祈禱文集に似たフランスの園々、

宵々の懊悩と沈黙の謎

敗走する道ぞいに咲続いていたバラの花、

パニックの風に

怯えて逃げる兵士に

錯乱した自転車に 皮肉な大砲に

哀れなぼろを着た賈のキャンパーに

厭々をしていたあの花たちを。

だがこの追憶の渦は いつもわたしを

おなじ停止点へ連れてゆく、サントマルト、

一人の將軍と夜のざわめき

森はずれにあったノルマンディのヴィラ

いっさいのものが沈黙し 闇には敵の気配もない、

その夜わたしたちは知った、パリが降伏したことを。

わたしはけつして忘れまい、リラの花をバラの花を。

そしてわたしたちが失った二つの愛を。

最初の日の花束 フランドルのリラの花

死化粧をしていたそのくらやみの優しさよ、

退却の日の繁み 感じやすいバラの花

遠い戦火の色 アンジューのバラの花よ。

アラゴンが敗戦の祖国を歌った、最初の作品である。そしてまた、敗戦フランスのジャーナリズムが一種スリルと不安を感じながら、意識的に取上げた抵抗文学作品の

いわば第一号でもあった。アラゴンはこれを、ドルゴーニュ地方のジャヴェラックというボルドー東北の小さな町で、一九四〇年七月に作っている。当時アラゴンは、四〇年六月四日ダンケルクでドイツ軍に敗れ、一時イギリスに逃れたのち、ふたたびフランスに帰って、降伏まで後衛作戦に従軍しているが、詩篇は降伏後、同地で妻のエルザと再会し、召集解除を待つ間に書かれたらしい。その後彼は、七月三十一日の召集解除と同時に、ひとまずコレーズ県にある友人ルノー・ド・ジュヴェナルの別荘に移り三週間滞在したのち、さらに八月末南フランスのカルカソンヌに移った。彼の戦前よりの版權出版社であるガリマールが、カルカソンヌに戦火を避けていたからである。その頃すでに、詩集『断腸』に収められた作品の大部分はほぼ輪郭が出来上っていたし、アラゴン夫妻はまずこれらの出版と当面の生活援助を、ガリマールに相談するつもりだったらしい。ところがガリマールは、今後の事業の不安定を理由にこれのことわっている。「これから先、作家としての私は生活の糧を稼ぐ見とおしを持ちません。のみならず、他に何か仕事を見出せるかどうかも疑問です。軍隊で貰った給与の残りを注意して使って、私たちは十一月一日までは、ささやかにここで暮せます。

しかしそれから先はまっくらです。詩は書いています。戦争が続いていた限りは、まだそれも時に出版する可能性があります。私は、これからも依然として書続けますが、それは今では自分のためです。そして自分の仕事に何が起こるかも分らずに書くということは、大変勇気が要ります。エルザと再会してからこちら、なんという怖い日々でしょう！ しかしこのことから私がペシミスティックになったなどと結論しないで下さい。そうとられては困るのです。私の国では、不運なときでも、また庄しつぶされているときでも、行為によって表現するしか道は残されていないと私は確信しています」と、そのころアラゴンは、旧友ジョセフスン宛に書送っている。

このような事情のなかで、「リラとバラ」は、突然九月二十一日号のフィガロ紙に発表された。発表については、アラゴン自身何ら関知しなかったらしく、ところどころ誤もあり、その後九月二十八日号の同紙に今度は作者の訂正申入れをつけて、再度全篇掲載されている。当時アラゴン夫妻はこの地の詩人ジョー・ブスケの家をしばしば訪れているが、前大戦の負傷が因で半身不随になって横わるこの老詩人のサロンには、南仏に難を避けていた文学者やジャーナリストたちが集って、おのずときたるべ

き抵抗の温床が早くもつくられつつあった。アラゴン夫妻のほかに、ジャン・ポーラン、ジャン・シュランベルジェ、ジュリアン・パンダなどが中心となり、のちに人類博物館事件の最初の犠牲者となったボリス・ヴィルデなどの顔も見えた。そのうちの誰かが、「リラとバラ」を写し持っていて、それが数人の手を経てフィガロ編集者に渡ったものであった。

作者の了解も得ずにフィガロがこの詩を掲載したこと、さらにそれが、のちに述べるように数ヶ月前までは懲治隊に配属されていたコミュニスト詩人の作品であったということは、敗戦フランスの言論界がナチス・ドイツに対して危険な瀬踏みを行っていたということだろうが、それだけに、「リラとバラ」がひとたび大新聞の紙上に発表されてみると、人々の驚きは想像以上に大きかったらしい。彼らは、当然フィガロにたいする官憲の圧迫を予期した。ところが予期に反してフィガロには表面上なんの干渉も行われず、作者アラゴンにのみ逮捕状が出そうになったのである。この官憲の態度が、当時多少とも良心的に祖国の不幸を憂えていた人々にとって重要な啓示となつたことはいうまでもない。つまり、官憲の処置は、明らかにこの作品を危険なもの

と認定したこと、にもかかわらずこの作品の発表を禁止する合法的な理由を官憲が見出せずにいることを意味したわけである。そこには、敗戦によって占領地帯と自由地帯という特殊な状態に置かれた当時のフランスを考えてみる必要がある（六月二十二日の休戦条約でフランスは、中央以北の全部と西部大西洋岸一帯をドイツ軍占領下に置かれ、のこりのフランス全土の約五分の二にあたる南部地方だけが、いわゆる自由地帯とされた）。ナチス・ドイツの代弁者たるヴィシー・フランス政府は、この詩に歌われた感情を、たとえ沈黙によって示されているにしても全フランス国民の感情と、認めざるをえなかったのだ。したがって「リラとバラ」一篇を禁止することによって、わざわざ国民の反ナチス感情を刺戟し逆に団結させる効果を与え、今後の対独協力政策に支障をきたす面の方をむしろよく怖れたというのが実情だったろう。同様のことは、当時のアラゴンの周辺についても言えた。彼はこの戦争で、ダンケルク以来の戦功によって、三つの勲章と二つの感状を貰っているが、この国民的英雄という生きた事実を前にして、フランス官憲は「リラとバラ」の詩人の逮捕を見送らざるをえなかった、という皮肉な事情があった。一見たわいもないことだが、抵抗期の合